

夕立（貸浴衣汗雷）

夕立の

雨も一と降り馬の背を

分けて涼しき川岸に

柳の枝の寄添ひて

いつしか色に鳴神の

音さへ遠き筑波東風

残る暑さを川水へ

流す上手の帰り船

草の葉に

宿りし月も小夜風に

憎やこぼれてばらと

露か雫か

雫か露か

濡れて色増す野辺のいろ

粹なお方に釣合はぬ

野暮なやの字の屋敷者

十の年からお小姓を

勤め通して御側役

はたちは越せど色恋は

旋ぎびしく白玉の

露にも濡れし事はなく

あとはいらへも長づとの

油香りて媚めかし

初の御見に手を取られ

飛立つ程の嬉しさは

蚊帳より胸に波うちて

紅麻うつる顔の色

またひとしきり降る雨に

仲を結ぶの雷や

こわさに抱き大川の

深き契りぞ交しける。